

町長

ひとくごと

33

齊藤 讓

行政は、文書で始まり文書で終るといわれるように、毎日役場の中を飛び交う文書も相当の数のにのぼる。

私は、社会に出てから二十数年此の方、活字や数字を追い求めて生きてきた。今も変わることなく、書類との格闘を続ける毎日であるが、時には活字の無い世界へ行つてみたいと思ふことさえある。これらの文書も、時代と共に様変わりをし、かつてはガリ版刷りが主流であったものが、やがてタイプ印刷となり、これも数年前からすっかり姿を消して、今ではワープロ印刷が全盛となっている。

ワープロの活字は、ガリ版やタイプに比べて、格段にきれいで、読み易く、また仕上げた文書の体裁も美しい。

しかし、私には何故か個性に欠け味気なく感じられて仕

方がない。だから、直筆で書かれた文書を見ると、妙に親しみを感じるのであるが、特に、今ではすっかり見ること

が少なくなつた毛筆の手紙を時折いただいたりすると、たまらなく懐かしい気がして、一字一句、筆の運びまで、なめるようにして読み、相手の人柄を

偲んだりする。筆字の持つ特有の温かさや個性の滲み、定型化された活字社会の中には、一服の清涼剤のように心に沁み透ってくるのである。町が物事を決定する時は、問題の軽重を問わず、必ず担当の職員がその案を起し、上司の決裁を得ることになる。この担当職員が起す何い文書を起案文書というのであるが、最近の若い職員は、先輩達と比べ総じて文字が下手である。

カ い つ ば い

彼等が書いたこれらの文書は、後々まで残る公文書である。たとえ文章の内容が立派であっても、あまり下手で乱暴な文字で書かれていたとすれば、公文書としての信頼や威厳を欠くことにもなる。私は、常日頃若い職員に「魂を入れてしっかりとした文字を書け」と口うるさく注意している。

「そういう町長はどうですか。」という職員の反論が、顔

を以って貴しと為すからとつた。「貴和」という記念碑を建てた。これは立派なもので、何も言うことはないのだが、問題は東陽小学校である。過日、大木輝夫実行委員長はじめ役員の方々が来られて、何としても校則の「カいっばい」を私に書けというのである。固辞に固辞を重ねたが、とうとう引受けてしまった。その日から苦しみが始まり毎晩毎晩、冷房の消えた町長室で、汗まみれになつて書いた。しかし、悲しいかな所詮は付け焼き刃であり、衆目に耐えられるものは、とうとう書けな

に現われる。それが、痛いところである。実は、かく言う私も子供の頃から母親に、お前の字はいじけていると言われ続けてきた生来の悪筆である。私の祖父も下手な筆字を書いては、お前にはこうは書けまいと嘯いていたとよく母が笑って語るのであるが、私の悪筆も父親共々にどうも父系遺伝の憂き目に逢つたようである。幸か不幸か、心臓の強いのも、一諸にいただいた

結婚式やパーティーなどの受付での記帳はたまらなく苦痛で、その度にあの出雲大社の悪夢を思い出し、未だあの時と同じようなみすばらしい字で仕方なく署名をしているような次第である。我れながら哀れである。ところで、今年には白浜・東陽の各小学校が、創立百周年を迎え、既に白浜小学校は六月にその祝賀の式典を盛大に行った。その際、沼田県知事の揮毫により、和

か。恥をかいたようなものである。先生が碑の前で生徒に向つて、「皆さんここに書かれてるように、カいっばい勉強しましょう。でも、お習字をおろそかにすると、将来こんな下手な字を書くことになりすよ」といつている姿が目につくようである。来る十月二十二日の除幕式は、私にとってつらく、切ないものとなりそうだ。